

『近代日本の象徴主義』 文学史を組みかえる

(おうふう、2004年3月)

文学部教授 木 股 知 史

はじめりは、2000年の春に和歌山県立近代美術館で開催された田中恭吉の回顧展であった。萩原朔太郎の詩集『月に吠える』に挿画を提供した田中恭吉の版画やペン画を前にしたとき、その内側から迫ってくる力に心がふるえた。ごく簡単に言えば、田中の作品には、心そのものの表現が感じられたのである。その美を概念としてとらえるならば、日本の象徴主義と表現してみるしかないように思った。具象的な形を残しながら、内的な想念を表現している田中恭吉の表現は象徴主義を体現しているという実感が確かなものとして心に浮かんできたのである。

従来の文学史では、近代日本の象徴主義は、ロマン主義の補完物のようにとらえられ、主に詩のジャンルに限定されたものと考えられてきた。外来の概念であった象徴主義は、結局十分根づくことがなく、言葉の暗示的技法としてのみ眺められてきたのである。田中の作品の前に立って、おぼろげに去来したのは、美術と文学の交流という視点に立てば、従来とは異なった象徴主義の見取り図を描けるかもしれないという予感であった。ここ10年ほど、1900年から1910年代にかけての詩歌の表現と、美術の視覚的イメージの交流の研究を続けてきたが、象徴主義を再考するというモチーフによって、その作業に一つの核を与えられるかもしれないも思った。

打ち棄てられていた象徴主義の概念を再考することによって、新たな文学史を提示することができるかを模索するために、系統だった勉強を始めて、いくつかのことに気がついた。西欧では、文学、美術、音楽を一体として把握する象徴主義の理解が一般的だが、近代日本の文学史には、そうしたジャンルを越境する理解が手薄だということ。上田敏によって紹介されたマラルメの暗示のほか、内的理念の表現というモチーフがあり、近代日本にも、そうした流れを見出すことができるということ。西欧伝来の

近代小説の概念をはずすと、美文、小品、散文詩と呼ばれた独自の散文表現の水脈が基層に流れていて、予想外に豊かな稔りの系譜が見出されるということ。文学と美術の交流によって、内的理念の表現というモチーフが確かなものとして育まれたということ。夢や無意識への関心が1910年代に共時的に現れてきているということ。これらのことから、自分がこれまで規範と思っていた文学史の像は、じつは、ある相対的な枠組みに拘束された結果の産物だということもわかってきた。また、文学史の現場において作品にふれると、既成の評価とはまったくちがう感触があることも実感された。象徴主義を再考することによって、自然主義とモダニズムの間の断絶を架橋することができるし、写実偏重の文学史のかたよりをただすこともできると考えたのである。

ある程度の見通しができた時点で、本にまともにおきたいと思った。最初ももっと厚手のハンドブックを企画したのだが、いろんな事情から、思い切ってオリジナルのテキストとしても使えるものに方向転換した。ただ、象徴主義の諸相を概観できるような組み立ては放棄せずにさまざまに工夫をこらした。部では、表現の流れを、エッセンスの引用と解説によってたどり、部では、美術と文学の交流を実例によって示した。部の文献解題は地味だが、現物にあたり、象徴主義の広がりや一次資料をとらえるようにつとめた。なるべく、多くの図版を掲載し、相互に参照できるような記号を付した。

信頼できる力量のある研究者と、大学院生たちに執筆に加わってもらった。若い仲間との共同作業は苦勞も多かったが、理念を共有する楽しさは何物にも代えがたいと思う。本作りは手間がたいへんで投げ出しなくなることもあるが、制作の過程で新たな着想が生まれてくるのが最大の魅力である。いまは、小品や散文詩の系譜の発掘に力をそそいでいる。